

梅棹忠夫『文明の生態史観』を読む



会長 渡辺利夫

この世界において高度の文明国となることに成功したのは日本、ならびにその反対側に位置する西ヨーロッパ数カ国の「旧世界」のみであり、これらと中国、東南アジア、インド、ロシア、イスラーム諸国との間には顕著な発展格差がある。

梅棹忠夫は、この2つの地域のうち前者を「第一地域」、後者を「第二地域」と名付けてこう述べる（梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論新社、2002年））。

「第一地域というのはちゃんとサクセッションが順序よく進行した地域である。そういうところでは、歴史は、主として、共同体の内部からの力による展開として理解することができる。いわゆるオートジェニック（自成的）なサクセッションである。それに対して、第二地域では、歴史はむしろ共同体外部からの力によってうごかされることがおおい。サクセッションといえ、それはアロジェニック（他成的）なサクセッションである」

問題は現代である。現代は中国の発展に見られるように第二地域の勃興期である。梅棹はここで次のように喝破する。

「それぞれの共同体は、共同体として発展してゆくのであって共同体を解消するわけではない。第二地域は、もともと、巨大な帝国とその衛星国という構成をもった地域である。帝国はつ

ぶれたけれど、その帝国をささえていた共同体は、全部健在である。内部が充実してきた場合、それらの共同体がそれぞれ自己拡張運動をおこさないと、だれがいえるであろうか」

どうやら現代そのものを考える視点がここで与えられたように思う。日本史を顧みれば、巨大なユーラシア大陸の中国、ロシアから朝鮮半島を経て吹いてくる「第二地域」の強い気圧の等圧線からいかにして身を守るか、これが最大のテーマであり続けたことがわかる。古代における白村江の戦いも元寇も、秀吉の朝鮮出兵もそのことを証す歴史的素材であろう。

日清、日露の両戦役は旧世界の中心部からの「高圧線」に抗する戦いであり、日本はこの「第二地域」との戦いに勝利して後に大陸中心部の中国に攻め入り、協調と同盟の関係を築くべき第一地域の海洋国家イギリスとの関係を放棄させられ、第一地域のもう1つの海洋勢力アメリカと対決して自滅した。

日米同盟を基軸とし、台湾、東南アジア、インド、さらにこれにオーストラリア、ニュージーランドの海洋国家群がユーラシア大陸を牽制しながら自らの生存と繁栄を図る、そうした生き方が日本の賢明な選択であることを「文明の生態史観」は示唆しているのではないか。